

1 水俣病の発生について

1-4 差別について

Q1 差別している人の気持ちは。

どうしてうつる病気ではないのに、差別を受けなければならなかったのですか。

水俣病にかかった人を同じ地域のそうでない人はどう思ったのか。水俣の中にも病気にたいする誤解はあったのですか。

A1 当時は病気が分らず、「奇病だ、伝染する病気だ」などという誤った情報に「うつるかもしれない」という気持ちから差別や偏見がめばえ、過度な反応をしてしまうということがありました。被害者に補償金が出るようになると、「お金目当てのニセ患者だ」などと誤解に基づく差別や「補償金をもらってよかね。私も水俣病になりたい」といった妬みや誹謗中傷をいわれるようになりました。

チッソに依存して生活している人たちが多く、企業城下町という意識が市民の中に浸透しているため、工場を守る、自分たちの生活を守るという気持ちから、患者の行う活動を快く思っていない人たちもいたと思います。

Q2 いじめや差別をなくすため、環境を守っていくために私たちにできることはなんだろうか。

A2 まずは事実を知ることだと思います。事実を知ることにより、誤解を無くし、差別や偏見をしないようにしっかりと考え、態度で示していくことではないでしょうか。相手の立場を考えて、思いやりを忘れない心をもつ、自分がされたら嫌だと思うようなことは人にはしないなど、周りに左右されることなく自分でしっかりとした考えをもって行動することが大切です。そして、水俣病は環境を破壊して起きた公害病ですので、環境を守るために自分ができることを考え、生活の中で実践することです。水俣市民はごみを減らすように工夫したり、分別収集によるリユース・リサイクルを推進したり、身近にある山や川や海を汚さないようせっけんを使うといったことを行っています。

それぞれが、環境を守るためにはどうすればいいのか自分で考えて欲しいと思います。

Q3 水俣病の人は差別を受けて外に出られなかった時、どうやって生活していたのか。

A3 差別が最もひどいときは、差別やいじめを恐れて、家族に患者がいることを隠して生活をしていて、雨戸を閉めてひっそりと暮らしていたこともあったと聞いています。

Q4 水俣病への差別はどんなものがあったのか。

A4 当時は病気がよく分かっておらず「奇病だ、伝染病だ」といわれのない差別や偏見があり、患者やその家族と会うことを拒まれる、近所付き合いがなくなる、共同の井戸を使用できない、店で物を売ってもらえない、外を出歩くことを許されないなどで、石をなげられたりもしたという患者さんもいたそうです。補償されるようになると、妬みやお金目当てのニセ患者と思われ、地域の中で孤立した人もいると聞いています。

Q 5 水俣病による差別やいじめは今もあるのだろうか。

水俣病はうつらないとわかっているのに、今もいやな思いをしている人はいるのだろうか。
水俣病に対する差別の現状について

A 5 現在でも、水俣病に対する差別や偏見が無くなったとはいえません。水俣病に対する知識や情報が市民に正確に伝わっておらず、誤った情報を信じている人たちの考えを変えることは難しいと感じています。水俣病は伝染すると思っている人はほとんどいないと思いますが、慢性型や軽症の患者は、外見からは健常者との区別がつかないために、ニセ患者と思っている人がいると聞きますし、患者とチツソ側に立つ人との間に大きな厚い壁があることを感じます。水俣病問題の解決という水俣市の大きな課題に向って、それぞれの立場を尊重しつつ「もやい直し」の心で協働して取り組むことが必要だと思っています。